

「おはようございます」と皆さんに挨拶できる幸いに感謝します。なぜなら、それが当たり前でない日常を生活していることを改めて思うからです。ところで、「今やその時」という今日の説教題をご覧になりどう思われたでしょうか。「今やその時」というこの題だけを見るなら、今の世界情勢を思い、「なるほどそういうことか」ということにもなるのでしょうか。けれども、説教題を決めたのは二ヶ月前のことです。ですから、当然のことではありますが、今の世界情勢についてはまったく想定すらしてはおりませんでした。決めた理由は、今日がレントに入った直後の主の日であり、また、御言葉が指し示していることがイエス様の十字架の出来事でもあるからです。それゆえ、今申しましたように、私たちの置かれている今の状況については頭の片隅にもありませんでした。しかし、実のところはどうか、想定できなかつたということではなく、しなかつた、したくなかつたということが真実なように思うのです。なぜなら、そこに思い込みや決めつけ、また期待や願望など、そうした自らの身勝手な思いがあったことは否めないからです。それゆえ、そのような自らについては深く恥じ入らなければなりません。人間の罪の全てを背負い十字架につかれたのがイエス様であるからです。従って、そうである以上、戦争という、人間がなし得る最も愚かな出来事をまったく想定していなかつたと口にするには言い訳にもなりません。しかも、イエス様を自分の意識や狭い経験の中に押し込めるだけの私の卑しさは、イエス様のことをまっすぐに見てはいないことの確かな証拠でもあるからです。私は、そのことをこの度世界に起こった暴挙と、この日の御言葉を通して図らずも知らされたように思います。けれども、そのことをこのタイミングで知らされたことはとてもありがたいことであつたようにも思うのです。

イエス様に対して私たちが一番に期待

することは何か。それは、分かりやすさであり、親しみやすさだと思います。では、御言葉に対してはどうか。それは知恵や教訓といった、信仰ゆえに得られる特別な対価ではないでしょうか。それゆえ、私たちはその期待や願望に応じてもらうことばかりに心を砕いてします。ただ、そんな私たちにとって、この日の御言葉はどうでしょう。非常に分かりにくく、取っつきづらいものなのではないでしょうか。それゆえ、私たちが、もし、ここから分かりやすい何かを掴み取ろうとするなら、そこで見えてくることは、信仰の身勝手さなどの負の側面ではないように思います。しかし、この度の出来事を通し図らずも知らされたことは、この分かり難さ、取っつきづらさと正面から向き合うことの大切さです。なぜなら、プーチン氏の目指しているところが大口ロシア、帝国の復活であり、また、その自らについてプーチンが熱心なキリスト教徒であると公言してはばからないように、そんなプーチン氏にとっては、この日の御言葉は、恐らくは、今回の暴挙の理由付け、合理的根拠を与えることにもなるからです。それは、「キリストがそうである」と、自らの行動を正当化させる材料を提供するに十分なものであるからです。しかし、私たちはもちろんそうは考えません。けれども、プーチン氏と全く正反対の側に立つことは、私たちにとっては分かりやすいことではなく、むしろ、分かりにくいことのように思います。なぜなら、戦争が何一ついいものを生み出さないように、ただ反対するだけでは、人が人として生きる上での確かな手応え、いいものは何一つ手にすることができないからです。まただから、私たちはそこで分かりやすさを求めてしまうのでしょうか。けれども、それを求めてやまない私たちに、神様に造られた人として生き続けるための知恵と力を与えて下さるのがイエス様であり、神様であるのです。ですから、そのためにも分かり

難さ、取っつきにくさを避けるのではなく、そのど真ん中に身を置くことが大切なのです。

そこで、早速、御言葉にご一緒に聞いて参りたいのですが、この日、私たちに与えられている御言葉は、いわゆる「ガダラの豚の話」と言われているものです。ちなみに、このガダラという土地はどこにあるのか。地理的には、ガリラヤ湖の対岸、東側にあり、土地としては痩せた荒れ野でありました。そして、そこに住む人々は異教徒であり、つまりは、ユダヤの人々から見れば、「向こう側の世界」であるということです。ですから、分かり難さはそれゆえのことだとも言えるのですが、けれども、それだけではありません。ガリラヤ湖の向こう側ということはつまり、湖を挟んで接しているということです。つまり、生活圈を共有しているということでもありますが、ですから、話そのものの分かりやすさはそのような関係性の近さを表しているとも言えるでしょう。けれども、この近さが返って分かりにくさをもたらしてもいるのです。なぜなら、私たちが正しく何かを知ろうとするときには、その背後にあるものをあれこれと考えないわけにはいかないのです。そして、その背後にあるものがまったく理解不能なことではなく、ある程度想像でき、また分かるだけに、「どうして」との思いが生じることとなり、私たちに困らせることにもなるのです。ここでは、その一つが悪霊の存在であり、また、荒野ゆえの貧しさでもあるでしょう。

ですから、そこで合理的な説明を無理に加えようとするればどうなるのか。その答えは、自分だけしか分からないような、そんなご都合主義で身勝手なものとなるということです。それゆえ、そうした自分本位なあり方が胡散臭さを撒き散らすのは必然です。「ガダラの豚の話」の中にはそうした一面があるように思いますが、正直申せば、それがこの物語についての私の第一印象でもありました。ですから、私にとっては、あまり好んで触れたいはない御言葉の一つでもあるのですが、けれども、それがこの日私たちに与えられた御言葉でもあるのです。そこで、

簡単に話の流れを追ってみたいのですが、それはイエス様一行がガダラについたときのことです。悪霊に取り憑かれた二人の男が墓場から突然一行の前に現れ、そして、こう叫んだのです。「神の子、構わないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか」と。このことはつまり、悪霊は、イエス様が「神の子」であると正しく理解していたということです。そして、この時の悪霊の気持ちは、私たちにもよく分かります。イエス様と出会ったがゆえの苦しき、イエス様と出会うということは、自らの罪、その欠けの多さ、至らなさと同じことであり、それゆえ、嬉しいばかりではなく、イエス様のことを知れば知るほどその苦しきも大きくなっていくのです。このように、私たちの信仰の歩みは現にそういうものでもあるのです。

では、そのようなとき、私たちはどうするのでしょうか。遙か彼方にたくさん豚を見つけたこの二人がイエス様に向かって「我々を追い出すなら、あの豚の中にやってくれ」とお願いしたように、イエス様の前から隠れたくもなるでしょう。けれども、そこで逃げたくとも逃げられないのが私たちなのです。なぜなら、私たちのことを抱きしめ離れようとしたくないのがイエス様というお方であるからです。けれども、悪霊に対しては違いました。寛容にもその願いを聞き入れ、「行け」と、目の前から去ることをお許しになったのです。ところが、悪霊が豚の中に逃げ込むやいなや、何が起こったのか。豚の群れは一斉に湖になだれ込み、すべてが死んでしまったのです。ですから、話としては、イエス様の手によって悪霊は退治され、他の癒やしの物語と同じように、悪霊に取り憑かれた男たちも正気を取り戻して、共同体への復帰が図られたということです。それゆえ、ここでのことは、イエス様はすごい、信じる私たちの目も確かだ、良かった良かったで終わっていい話だと言えるでしょう。私たちが聞きたいのはそのことであるからです。ところが、話はそれで終わりません。その夥しい数の豚は野生の豚ではありません。豚飼いがいたということはつまり、豚は誰かの所有物であり、それ

ゆえ、豚飼いも事の顛末を所有者に伝える義務がありました。そこで、報告を受けたガダラの町中の人々がイエス様のところに急ぎやって来て言ったことが、悪霊を退治してくれた事への感謝ではなく、「ここからすぐに出て行って欲しい」ということでした。つまり、ガダラの人々にとって、イエス様は招かざる客であったということです。

ただ、その動機を考えるなら、彼らの言動は私たちには理解に苦しむことでもあるのでしょうか。けれども、その一方で、別のある一つの事実が私たちを悩ませるのです。それは、イエス様の存在そのものが対立を生じさせているということです。このことはつまり、その福音宣教とその結果との間には矛盾があるということです。しかも、それは、この時に限ったことではありません。私たちを悩ませるのは、むしろ、その後の歴史です。それは、この度のプーチン氏の暴挙が示すように、時の為政者に都合よく利用されてきたのがイエス様の存在であり、聖書の御言葉でもあるからです。それゆえ、豚を失った人々のように、混乱のただ中に突然追いやられた人たちが、イエス様に向かって「ここから出て行ってくれ」とそう叫びたくなる気持ちはよく分かります。ただ、そこで私たちが忘れてはならないことは、イエス様も神様の御言葉も、力を持つ者にとっての、都合のいい戦いの武器ではないということです。そして、そのことを証しているのが、他にもないイエス様を信じる私たちでもあるのです。ただ、そうであるなら、そこで私たちは何を語り、世に対してどのように振る舞えばいいのでしょうか。そのためには、御言葉を通して神様の恵みを受ける必要があるのですが、では、この分かりにくい御言葉、私たちが時に嫌悪感すら覚える御言葉から、私たちは一体どんな慰めを受けることができるのでしょうか。しかし、今の私たちがそうであるように、為す術もなくただただたずむしかないその時、私たちはイエス様から、また、聖書の御言葉からどんな慰めを受けることができるのでしょうか。この日に御言葉を通し私たちに問われていることは、まさにこのことでもありますが、

このことはつまり、私たちの受ける主の慰めとは、私たちの意思や理解力の問題ではないということです。

十字架の出来事は私たちにとってはどこまで行ってもすっきりした答えではありません。それゆえ、イエス様と出会ったというこの事実は、私たちを心地よいたけの境地に至らせるものではありません。私たちを罪の現実の前に立たしめるものであるからです。このことはつまり、イエス様との出会いは、私たちを矛盾した状況に導くということです。まただから、私たちはイエス様に期待し、また願ってしまうのです。混沌とした分かりにくさではなく、すっきりとした分かりやすいものを求めてしまう、それは、私たちがまさに自らの罪の現実と向き合っているからです。そして、このことはまた、私たちが救われていながら、いや、救われているからこそ苦しむという、この矛盾した状況に置かれるということです。しかし、十字架の出来事が明らかにすることは、この矛盾のただ中にこそ、イエス様は共にいましたもうということなのです。ですから、プーチン氏がキリスト教徒として、もし何か大きな過ちを犯したとするなら、その最大の過ちは、矛盾する現実と共にあるイエス様を見失ったことです。まただから、彼はイエス様の思いと自らとを重ね合わせることができず、自らの力を過信し、また、自らの立場に拘り、今回のような結論に至ったのでしょうか。しかし、そうなったのにはもう一つの別の理由がありました。それは、聖書の御言葉が伝える現実と、私たちが御言葉に期待するものとが相反する状況にあるからです。

十字架は、イエス様にとって苛烈なものでもありましたが、けれども、自らに課せられた神様の酷い仕打ちとは、イエス様は考えてはおられませんでした。このことはつまり、イエス様がそうであるように、この矛盾した状況にただただたずむしかないのが私たちキリスト者であるということです。それゆえ、この信仰の現実とは、自らを被害者の立場に置かせることにもなるのでしょうか。けれども、不都合なもの、理解できないものを排除し、溜飲を下げることをイエス様は私た

ちに求めません。イエス様が「敵を愛せよ」と仰るように、被害を与えるものを敵と決めつけ、力尽くでの、ましてや武力をもってしての解決を求めることはしないからです。ですから、ここでのイエス様がそうであるように、今世界で起きていることに対して私たちのなすべき事は、自らの立場を主張し、また、その主張を相手に押しつけ、解決を得ようとするものではありません。では、私たちはどうすればいいのでしょうか。そのことの答えがまたここに記されてもいるのです。

イエス様が何をなさり、何を仰っておられるのか、それがさっぱり分からないことは度々あります。私たちが置かれている今の状況がまさにそうだと思うのです。バイデン氏が、制裁か、さもなくば、第三次世界大戦か、現状に対する二つの選択肢を示したのはご存知のことと思いますが、大国の為政者の口からに第三次世界大戦という言葉がこのタイミングで出て来たことに私は驚きを隠すことができませんでした。それは、第三次世界大戦がすでに視野に入っているということです。そして、このことはまた、プーチン氏が核の使用を辞さないことを公言しているように、その先には核の応酬とその結果としての世界の破滅をも見ているということです。そして、恐ろしいことに、世界はそのことの危険性を理解しながらも、解決のための有効手段を持っていないのです。しかも、その決定権は、大国の為政者だけが握っているわけです。では、一人の為政者の気持ちの高ぶりによって、最後を迎えてもおかしくはないこの現状を、私たちはどのように受け止めればいいのでしょうか。そこで、一つ言えることは、私たちの願いは、人類の繁栄とその存続のために、ウクライナの人々に人身御供になってもらうことではありません。ただ、私たちには、動き出した歯車を止める手立てがないのです。では、私たちはそれほどまでに無力なののでしょうか。神様もイエス様も、そんな私たちに手を差し伸べてはくださらないのでしょうか。そこで、東西冷戦が終わった際に、作家の大江健三郎さんが仰ったある一言を思い出します。大江さん

はこう仰いました。「東西冷戦下、世界が破滅から守られたのは、世界中の人々の祈りがあったからだ」と。そして、それは真実であると私は思いました。つまり、まさに、それが今私たちキリスト者に求められていることなのです。

プーチン氏を責める前に、また、変えられない現状を嘆く前に、私たちにはやるべきこと、すべきことがあるのです。それは祈るとです。祈ることは、自己の安心立命のためだけに与えられているではありません。この矛盾した状況に私たちをしっかりと立たしめるものは何か。それは、祈りであって、それ以外の何ものでもありません。まただから、私たちは矛盾する状況を嘆きつつも、いたずらに時を浪費することはありません。祈りの内にイエス様を見出し、そのイエス様に信頼し、全てを委ねることができるからです。それゆえ、今、世界は、その私たちが祈りを集めることを求めているのです。そして、世界を造られた神様と人類を救わんとするイエス様が、この祈りに押し出され、自らが今世界に何ができるかを考えさせようとしているのです。このことはつまり、私たちは今少しだけ背伸びすることを求められているということです。しかも、強制されてではなく、また、空気を読んでということでもありません。内側からほとぼしり出る自らの思いとして、精一杯の何かを、神様は私たちに求めておられるのです。ですから、そのためにも私たちはイエス様と共に、祈りの内にこの矛盾する状況にしっかりと立つことが求められているのです。なぜなら、どうして、なぜ、と、そう問うしかないこの状況の中にあって、御言葉が明らかにするように、私たちはイエス様を必ず見出すことができるからです。この日、御言葉が私たちに明らかにすることはこのことです。イエス様は、間違いなく、私たちの目の前に今おられるのです。そのことをしっかりと胸に納めて、切なる祈りをイエス様と共に神様に献げ、今のこの絶望の先にある希望へと繋がる、新しい一週間を歩んで参りたいと思います。祈ります。